

エスニック集団に着目したヨーロッパの地域理解

加賀美雅弘

東京学芸大学教育学部

ヨーロッパの地域理解は、従来、自然環境や文化の地域的多様性、EUによる政治・経済統合などに着目して進められてきた。一方、移民や難民といった、いわゆるエスニック集団に関する理解は少ないままである。固有の歴史や文化をもつ集団でありながら、彼らの視点から理解しようとする機会は意外なほど限られている。たとえば中学・高等学校の地理学習でも、彼らの流入が取り上げられているものの、よそからヨーロッパに加わってきた集団として位置付けられ、彼らについては理解しにくいままである。しかし、外国人がますます増えるヨーロッパの理解に彼らの存在は不可欠であり、そのための新しい視点の提示が必要であろう。ここではエスニック集団に着目した地域理解の可能性について論じた。

キーワード：エスニック景観、差別、見えない人々、ロマ、ヨーロッパ地誌

I はじめに

ヨーロッパは言うまでもなく多様な社会と文化から成り立っている。筆者は学生時代にヨーロッパ地誌の定番ともいえるアメリカの文化地理学者ジョーダンの*The European Culture Area*¹⁾を読んで以来、自然環境をはじめ産業やヒトの暮らしの地域的多様性こそがヨーロッパの個性であり、魅力だと感じてきた。今やEUによる地域統合が進むヨーロッパで、この多様性はいかに変容しているのであるか。この課題をもち続け、その解明に向けてヨーロッパの地域特性を追い求めてきたというのが、筆者のこれまでの足跡になる。

実際、ヨーロッパの地域特性に関する調査は、自然環境や文化の地域的多様性に加えて、EUによる政治・経済統合に着目して進めるのが常套手段とされる。現在のヨーロッパの特性は、紛れもなく古くから培われてきた政治や社会、文化によって形成してきたのであり、ヨーロッパを歴史的な背景を踏まえて理解する視点こそがヨーロッパ地誌の原点という見方も、おおかた共有されているところである。

ただし、ヨーロッパの多くの国には、その国の主流をなしてきた人々とは別に、少数集団でありながら固有の言語・文化とアイデンティティをもつ人々がいることにも注意を払う必要がある。古くから居住してきた少数民族集団や、20世紀以降に急増している移民や難民など多くの外国人がこれに該当する。いずれも固有の歴史や文化をもつエスニック集団であり、ヨーロッパの既存社会においてしばしば異質な集団であり続け、軋轢が生じたり、差別や排除の動きに発展したりすることもある。こうしたエスニック集団の増加が顕著な現状において、ヨーロッパを理解するうえで彼らを含めた議論が求められているのは当然であろう。

ところでエスニック集団とは、世界のエスニック集団の動向を論じた山下(2016)によれば、もともと居住してきた先住エスニック集団と移動してきた移民エスニック集団からなる。地理学ではヨーロッパの先住エスニック集団に関しては、たとえばスペインのバスク地方(石井, 2020)やフランスのアルザス地方(三木, 2003)、イタリアの南ティロル地方(加賀美, 2011)などの住民の社会や文化に関する記述がなされてきた。一方、移